

育児動機づけ研究の動向と今後の展望

: 親はなぜ育児をするのか?

Trends and future prospects of research on motivation for childcare
: Why do parents raise their children?

小林佐知子 ¹⁾	中島奈保子 ²⁾	松本麻友子 ³⁾
KOBAYASHI Sachiko,	NAKASHIMA Naoko,	MATSUMOTO Mayuko,
橘春菜 ⁴⁾	松岡弥玲 ⁵⁾	内山有美 ⁶⁾
TACHIBANA Haruna,	MATSUOKA Mirei,	UCHIYAMA Yumi,
金田宗久 ⁵⁾		
KANEDA Munehisa,		

【要旨】

本論文では、育児に対する親の動機づけに関する先行研究を概観し、研究動向を整理した。はじめに、動機づけの概念をもとに育児行動を捉える意義を踏まえた後、これまでの育児への動機づけ（以下、育児動機づけとする）に関する研究から得られた知見を整理した。次に、近年の動機づけ研究では認知機能が着目されてきた中で、同様の手法を用いて育児動機づけを捉えることの限界について指摘した。さらに、動機づけ研究の新しい流れである自動動機の概念をもとに、育児動機づけを無意識の側面から捉えることの意義と可能性について述べた。最後に、育児動機づけの今後の展望についてまとめた。具体的には、1) 無意識の育児動機づけを測定する手法の検討、2) 育児動機づけにおける感情成分の重要性、3) 育児動機づけへの影響因の検討、4) 父親を対象とすることの必要性を今後の検討課題とした。

1) 静岡県立大学短期大学部

2) 修文大学短期大学部

3) 神戸親和女子大学

4) 名古屋大学

5) 愛知学院大学

6) 四国大学

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜
松岡弥玲 内山有美 金田宗久

1. はじめに

「なぜ育児をするのか」という問いは、なぜ仕事に行くのか、なぜ食事をするのかなど、人の日常的な行為の理由を尋ねるに等しい。それらは日常生活を成立させるために必然であり、一つ一つの目的や結果を意識的に考えることはほとんどないまま日常の中に自動的に組み込まれている。「育児は親の当然の義務である」と考える人にとってはごく自然な行為であろう。

では、子どもを過度に放任したり、育児を回避する人がいるのはなぜであろうか。代表的なのは、ネグレクト（育児放棄）である。ネグレクトはマルトリートメント（不適切な養育）の1つであるが、ネグレクトに至らずとも、育児に向かわない親は少なくない。児童虐待は独立した現象ではなく、健康的な子育てと一続きであるように（加藤，2011）¹⁾、虐待の疑いのある場合も含めて広く存在するものと考えられる。また、最近では父親の育児参加のあり方が社会問題になっている。働く母親の増加とともに父親の育児参加が求められて久しいが、その動きは鈍く「ワンオペ育児」のように母親が仕事と育児の多重負担を担う家庭は少なくない（総務省統計局，2017）²⁾。

こうした社会問題については様々な研究が積まれる中、「なぜ育児をする（しない）のか」という根本的な問いに対し、育児行動の生起メカニズムから検討した研究はほとんどみられない。「育児は親がするもの」という社会風潮の中、育児をしなくてもよいと考える親はほとんどいないであろう。つまり、育児に向かう親と向かわない親には育児行動が生起するプロセスのどこかに違いがあることが考えられる。この違いについて、本論文は動機づけ（motivation）の視点からアプローチし、親はなぜ育児に向かうのか、あるいは向かわないのか、動機づけ理論を手がかりに検討していく。本論文では、まず、これまでの育児に関する動機づけ（以下，“育児動機づけ”とする）研究を概観する。次に、無意識の動機づけの視点から育児動機づけ研究の可能性を探る。最後に、育児動機づけ研究の今後の展開について述べる。

2. 育児動機づけに関する研究

動機づけは、人の行動の生起メカニズムを解明するための重要な概念として、心理学を中心にこれまで多くの研究が蓄積されてきた。動機づけは日常語では“やる気”のことであり、目標に向けて行動を生起し、持続させる働きをする。例えば仕事に疲れて帰宅した後、休む間もなく子どものために食事や入浴の準備をするという親の行動もこうした動機づけに支えられているといえる。

育児動機づけ研究の動向と今後の展開

：親はなぜ育児をするのか？

育児をテーマにした動機づけ研究はまだ少ないが、中島他（2015）³⁾は、乳幼児をもつ母親を対象に育児へのやる気について「育児動機づけ尺度」を作成した。育児動機づけ尺度は、老後の世話や夫婦関係など何らかの報酬のために行う「見返り期待」、育児が楽しいから行う「内的喜び」、育児をするのは当たり前だから、義務だから行う「社会的当為」から構成される。「見返り期待」と「社会的当為」は外発的動機づけ、「内的喜び」は内発的動機づけに属すると考えられる。また、親であることをどのように受け止めているのか、親役割意識と育児動機づけの関連を調べたところ³⁾、「見返り期待」が高いほど母親であることをネガティブに感じる一方、「内的喜び」が高いほどポジティブに感じていた。「社会的当為」は親役割意識と関連しなかった。ポジティブ感情が原動力になって育児に向かう人は、自身が母親であることを積極的に受け入れているが、他者に認められたいなど報酬を得ることが原動力である人は親であることによる制約感や負担感を感じやすいようである。

次に、育児動機づけと実際の育児行動との関連を調べた小林他（2018）⁴⁾では、「内的喜び」が高いほど子どもと遊ぶ、絵本を読むなど相互作用の時間が長いこと、「社会的当為」が高いほど家族の中で「世話」を担う割合が高いことが明らかにされている。「内的喜び」は、認知面や行動面で母親の育児における原動力になっているといえよう。ただし、「社会的当為」の高さは母親を世話へと向かわせており、世話行動においては“やるのは当たり前だから”という義務感に近い外発的動機づけが必要であるとも考えられる。先行研究はまだ少ないが、母親の内面ではこのような内発的・外発的動機づけが働いているといえる。

一方、育児を「やる気になるとき」「やる気にならないとき」を母親の自由記述をもとに検討した Tachibana et al. (2016)⁵⁾では、「やる気になるとき」は“子どもの笑顔や寝顔”を見る時が 38.6%と最も多く、次いで“子どもの成長”を感じる時が 29.2%，“子どものポジティブなフィードバック”があるときは 19.1%であった。子どものポジティブな行動や変化を感じる時に、母親の動機づけは高くなるようである。一方、「やる気にならないとき」はなかなか泣き止まないなど“コントロール不能”になるときで 51.7%と最も多く、“心身の疲れ”も 22.5%の母親が挙げていた。少数ではあるが、“時間的余裕のなさ” 6.0%，“自分の責任・力不足” 4.6%、他者からの“理解・サポートのなさ”も 7.5%にみられた。思い通りにいかない時や疲れている時は育児に向かわない様子がうかがわれる。

寺菌（2019）⁶⁾は、自己決定理論（self-determination theory; Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000）⁷⁾⁸⁾をもとに育児の動機づけ尺度を作成した。自己決定理論では、自律的であるほど（自己決定するほど）学業や仕事等の成果や精神的健康が高くなると考えられており、内発的

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜
松岡弥玲 内山有美 金田宗久

動機づけと外発的動機づけが自律性の程度によって一次元上に捉えられている。自己決定理論は5つの理論から構成されるが、その中の基本的心理欲求理論に基づく、3つの基本的欲求（自立性の欲求、関係性の欲求、有能さへの欲求）が満たされるほど自己実現や精神的健康が高くなるとされる（櫻井，2012）⁹⁾。育児期の母親を対象とした場合、育児の動機づけは「無動機づけ」「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化調整」「内的調整」の下位尺度で構成され、自律性の一次元上で捉えられることが確認された（寺藪，2019）⁶⁾。また、3つの基本欲求が充足している母親ほど、「内部調整」や「同一化調整」が高く、「無動機づけ」が低かった。このことから、基本欲求の充足が育児への内発的動機づけを促進することが示唆されている。

3. 育児を意識的な動機づけで捉えることの限界

これまでの育児動機づけに関する研究は、主に母親を対象になぜ育児をするのかを尋ね、言葉による回答を基に結果が導かれている。しかし、言葉によって意識的に回答された点に、育児動機づけ研究の限界があると考えられる。「なぜ育児をするのか」という問いに対する回答には様々なバイアスが混入することが予想されるためである。近代社会では、子どもに愛情をかけることが良い育児の証という社会風潮があり、子どもへの愛情が養育者を育児に向かわせるものと考えられてきた（山田，1999）¹⁰⁾。愛情をもって積極的に育児をすることが評価される社会では、「育児をしたくない」という回避的な欲求を抱えていても、それらは意識に上らないように、つまり親の心の中で抑圧しなければならない。しかたなく育児に向かう親も少なからず存在すると考えられるが、現代社会における親たちにとって、それらを意識したとしても言葉で表すことは容易ではない。

もう一つの限界は、近年の動機づけ研究では動機づけ過程における認知機能が着目されてきた点である。動機づけは基本的に「認知」「欲求」「感情」など心理的要因から成立すると考えられている。多くの動機づけ研究では、動機づけは学業や仕事のように目標を意識しながら達成していくための心のエネルギーとされ、意志の力が必要であると考えられてきた。ただし、これまでの研究はすべて意識的な動機づけを捉えているわけではなく、古典的研究である Freud のリビドー理論や Hull の動因理論、Maslow の欲求階層説などによる動機づけはむしろ認知水準が低いといえる（速水，2012）¹¹⁾。動機づけ概念の認知水準が高くなったことには、質問紙による測定法の開発が関与しており、それ以後は意識上の動機づけを捉えることが主流となった。「なぜその行動をするのか」という意識を捉えることは、近年多くの研究が積み重ねられた Deci & Ryan

育児動機づけ研究の動向と今後の展開

：親はなぜ育児をするのか？

(1985)⁷⁾等の自己決定理論や Dweck (1986)¹²⁾の達成目標理論 (achievement goal theory) にも共通する。自己決定理論では行動が自己決定的であること、すなわち自律的であることを重視し、自ら意欲的に行動することがよいとされる。これは、学業や仕事のように目標が明確な行動が対象とされたためであり、その場合は内発的動機づけのように能動的・自律的な動機づけが望ましいと考えられる。また、達成目標理論では、人の行動は、目標を設定し、それを達成するために生起すると考えられている。従って、どのような目標を設定するかという目標の適切性が重要になる。これに対し、家事・育児、身支度などの日常的に習慣化された行動は意識的な目標設定やそれを達成するまでのプロセスがあまり意識されずに進行する。人の日常的な行動の多くは意識のないところで、自分でも気づかないうちに方向づけられていることが少なくないのである。このような日常生活に埋もれた動機づけ(速水, 2012)¹¹⁾の視点からみると、認知機能を中心とした育児動機づけの解明は不十分であり、これまでの研究の枠組みをそのまま援用するには限界があるといえる。

4. 無意識の動機づけの視点

(1) 無意識の動機づけとは

近年、無意識の動機づけが着目されている。無意識は自覚のないまま個人の行動や思考、感情を方向づける働きをする。無意識の心理過程はフロイトの精神分析的理論で中核概念となった後、行動主義心理学が盛んになる中でほとんど検討されなくなった。しかし、最近では再び無意識の心理過程が注目され、学習や注意・選択、解釈、感情・情動、目標設定など様々な側面で心の働きの主要役割を担っていると考えられるようになってきている (Wilson, 2002 / 2005)¹³⁾。

こうした流れは動機づけ研究にもおよび、目標の設定から行動までの一連のプロセスがそれほど意識されることなく、自動的に進む動機づけは「自動動機」と呼ばれる (及川, 2012; Bargh, 1990)¹⁴⁾¹⁵⁾。特定の状況で目標の遂行が繰り返されるうち、習慣化してしまう行動などが含まれる。行動が習慣化されると、状況と目標との連合が形成され、手掛かりだけでそれが自動的に活性化される。人は起床から就寝までの一日の時間を意識の中で過ごしているが、仕事や学業以外にも様々な行動をする。それらの多くは習慣化されたルーティンワークであり、ほとんど意識せずに行動している。言い換えれば、意識の力がなくても行動は生起されるのである。また、無意識の動機づけを高めるのは感情であり、報酬などによるポジティブ感情が影響するとされている。他方、無意識の心理過程はもともと危険な刺激にできるだけ早く反応しようとする生存に

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜
松岡弥玲 内山有美 金田宗久

欠かせないシステムであるため、意識よりも早くネガティブ情報を評価する特徴があるという考え方がある (Wilson, 2002 / 2005)¹³⁾。具体的な知見はまだ不透明であるが、動機づけの構成要素の中で感情成分が重要な働きをすると考えられる。

(2) 無意識の動機づけと育児

日常生活の中で習慣的に行われる育児は、このような無意識の動機づけで説明される必要がある。ほとんどの養育者は当たり前のように毎日同じような育児行動を繰り返しており、それらは無意識的な行動といえるためである。例えばはじめての育児で戸惑いながら授乳のしかたを身に付けた後、親は子どもが空腹で泣きだすと自然に授乳を始める。これは、何度も同じような状況で子どもに授乳をしているうちに状況と目標との連合が形成されたためといえる。子どもが泣き出した時、多くの養育者はなぜ泣くのかを考えるのとほぼ同時に子どもに接近し、抱き上げたりあやし始めたりする。先述のように、無意識の動機づけ研究ではポジティブ感情が重要な動機づけ成分と考えられている。育児へのポジティブ感情を持っていると無意識のうちに、より積極的に育児行動を起こすのかもしれない。他方、Hajal et al. (2019)¹⁶⁾ではネガティブ感情は回避的な動機づけと関連することが示唆されている。Hajal et al. (2019)¹⁶⁾では育児動機づけの意識的な側面をみているが、無意識の動機づけ過程においてもネガティブ感情は少なからず影響をすることが推測される。

5. 育児動機づけに関する今後の研究の可能性

以上から、親はなぜ育児に向かうのか、あるいは向かわないのかという問いに対して動機づけ概念を中核に意識・無意識の両面から検討することは意義深いと考えられる。しかし、無意識の側面を捉えるための手法はいくつか開発されているものの、育児動機づけに関する実証的研究はまだ少ない上、測定方法は確立していない。今後、新たな測定方法を検討していく必要がある。育児動機づけにおいては感情成分が何らかの役割を果たすと考えられ (Hajal et al., 2019 ; Dix et al., 2004)¹⁶⁾、ポジティブ感情・ネガティブ感情の双方から動機づけとの関連性を捉えていく必要がある。また、速水 (2012)¹¹⁾によると、動機づけが最も高まるのは認知・感情がともに高い時であり、怒りや悔しさといったネガティブ感情をバネに目標に向かうような状態である。これに対し、家事や育児のような習慣的行動は覚醒水準が低く、それほど高くない一定の認知や感情のレベルで行動が生起されていく。無意識の育児動機づけの測定方法を検討する上では、日常の中に埋もれた感情をいかに掬い

育児動機づけ研究の動向と今後の展開

：親はなぜ育児をするのか？

取ることができるかが大きな課題といえる。

また、育児放棄や育児ストレス、父親の育児参加の不十分さなど、育児を巡る問題は現代社会の大きな課題である。こうした社会的課題に対し、親の心を育児に向けるためにはどうしたらよいか、育児動機づけへの影響因も合わせて検討していく必要がある。これまでの研究から、子どもの年齢や母親の就業形態（小林他，2015）¹⁸⁾、ソーシャル・サポート（Nakashima et al., 2016）¹⁹⁾が育児動機づけと関連することが示されている。Nakashima et al (2016)¹⁹⁾では祖父母や友達、公的機関など家族外からのサポートが内的喜びと関連することが示されており、周囲の人からどのような支援が育児動機づけと関連するのか、詳しく検討することも意義があると考えられる。また、Tachibana et al (2016)⁵⁾で示唆された心身の疲労感や、親のコントロール感を低減する子ども側の要因を合わせて検討することも必要である。

さらに、母親だけでなく父親も研究対象とする必要がある。父親の育児参加の少なさが社会的問題となって久しいが、なぜ父親は育児に向かわないのか、その心性はまだ解き明かされていない。父親の育児量は母親に比べて少ないこと（松田，2006；増井，2017）²⁰⁾²¹⁾、育児内容は子どもとの“遊び”が中心であること、育児の第1責任者は母親であることなど、夫婦間の育児分担の状況は長らく変わっていない（柏木，2011）²²⁾。父親の育児参加に関しては、単に育児回避とはいえ、就労状況をはじめとする労働構造の問題（ベネッセ教育総合研究所，2014）²³⁾や育児は母親がするものという伝統的な価値観、夫婦で共に育児をする上で母親自身が育児を抱えてしまう「ゲートキーピング」（加藤・黒澤・神谷，2012）²⁴⁾など複数の要因が影響すると考えられる。つまり、父親の育児参加にはいくつかのハードルがあり、育児に向かいたくても向かうことが困難な側面もあると考えられる。母親側の要因を検討する一方で、父親自身の育児動機づけを解明することも重要といえる。育児参加へのハードルを乗り越えようとする父親とハードルの前で立ち止まる父親の違いは何か、無意識の動機づけの観点から父親の心性を解明することは、親の心を深く理解し、より適切な育児環境を考えていく上で意義深いと考えられる。

文 献

- 1) 加藤尚子. (2011). 親に放任されている子. 児童心理, 65(7), 594-599.
- 2) 総務省統計局. (2017). 平成 28 年社会生活基本調査結果. 2021-7-13. (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html>)
- 3) 中島奈保子・松本麻友子・橘春菜・小林佐知子・松岡弥玲他. (2015).

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜
松岡弥玲 内山有美 金田宗久

- 子育て動機づけ尺度の構成. 日本発達心理学会第 26 回大会論文
集.
- 4) 小林佐知子・中島奈保子・松本麻友子・橘春菜・松岡弥玲他. (2018).
乳幼児をもつ母親の育児に対する動機づけと育児行動. 静岡県立
短期大学部研究紀要, 32-W(4), 1-7.
 - 5) Tachibana, H., Nakashima, N., Matsumoto, M., Kobayashi, S,
Matsuoka, M et al. (2016). Mothers' Motivation for
Child-Rearing Investigated Using the free description method.
The 31st International Congress of Psychology.
 - 6) 寺藪さおり. (2019). 子育て期の母親の育児行動に対する基本的
心理欲求充足と動機づけとの関連. 小児保健研究, 78(1), 33-40.
 - 7) Deci E.L. & Ryan, R.M. (1985) . *Intrinsic motivation and
self-determination*. New York: Plenum Press.
 - 8) Ryan, R.M., & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and
the facilitation of intrinsic motivation, social development,
and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
 - 9) 櫻井茂男. (2012) . 夢や目標をもって生きよう！ : 自己決定理論. 鹿
毛雅治 (編) . モティベーションまなぶ 12 の理論 : ゼロからわかる「や
る気の心理学」入門！ (p45-72). 東京 : 金剛出版
 - 10) 山田昌弘. (1999) . 現代社会における子育ての「意味」の危機. 家
族社会学研究, 11, 49-57.
 - 11) 速水敏彦. (2012) . 感情的動機づけ理論の展開 : やる気の素顔. 京
都 : ナカニシヤ出版.
 - 12) Dweck, C. S. (1986) . Motivational processes affecting learning.
American Psychologist, 41, 1040-1048.
 - 13) Wilson, T. D. (2002) . 自分を知り, 自分を変える : 適応的無意識の
心理学 (村田光二, 監訳) . 東京 : 新曜社. (Wilson, T. D. (2005).
Strangers to Ourselves. Cambridge, Harvard University Press.)
 - 14) 及川昌典. (2012) . 知られざる力 : 自動動機. 鹿毛雅治 (編) . モ
ティベーションまなぶ 12 の理論 : ゼロからわかる「やる気の心理
学」入門！ (p135-159). 東京 : 金剛出版
 - 15) Bargh, J. A. (1990) . Auto-motives : Preconscious determinations
of social interaction. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.),
*Handbook of motivation and cognition : foundations of social
behavior v.2* (pp.93-130). New York : Guilford Press.
 - 16) Hajal, N. J., Teti, D. M., Cole, P. M., & Nilam, R. (2019). Maternal
emotion, motivation, and regulation during real-world
parenting challenges. *Journal of Family Psychology*, 33(1),
109-120.

育児動機づけ研究の動向と今後の展開

：親はなぜ育児をするのか？

- 17) Dix, T., Gershoff, E. T., Meunier, L. N., & Miller, P. C. (2004) The affective structure of supportive parenting: Depressive symptoms, immediate emotions, and child-oriented motivation. *Developmental Psychology*, 40(6), 1212-1227.
- 18) 小林佐知子・中島奈保子・松本麻友子・橘春菜・松岡弥玲他 (2015) 子育ての動機づけと育児行動. 日本教育心理学会第 57 回総会論文集.
- 19) Nakashima, N., Tachibana, H., Matsumoto, M., Kobayashi, S., Matsuoka, M., et al. (2016) The Relation between Motivation for and Social Support in Japanese mothers. The 31st International Congress of Psychology.
- 20) 松田茂樹. (2006) .近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化. 家計経済研究, 71, 45-54.
- 21) 増井秀樹. (2017) .わが国における父親の子育ての現状. 別冊発達, 33, 20-23.
- 22) 柏木恵子. (2011) .父親になる, 父親をする: 家族心理学の視点から. 東京; 岩波書店.
- 23) ベネッセ教育総合研究所. (2014) .第 3 回乳幼児の父親についての調査 (速報版) . 2021-7-13.
(https://berd.benesse.jp/up_images/research/Father_03-ALL2.pdf)
- 24) 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司. (2012) . 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題: 夫婦ペアレンティングの理解のために. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 61, 109-126.

付 記

本研究は JSPS 科研費 19K03249 の助成を受けたものです。

(2021 年 8 月 25 日 受理)